

[研究論文]

現代高齢社会と戦後の小説
—安岡章太郎「海辺の光景」

高橋 啓太*

Contemporary aging society and a postwar novel
—Shotaro, Yasuoka. "Kaihen no Kokei."

Keita TAKAHASHI*

Abstract

The purpose of this paper is to read "Kaihen no Kokei.", the story written by Shotaro Yasuoka, as a text for consideration about contemporary aging society. The novel that has depicted emotion of a youth who lost his mother has been highly evaluated in a history of Japanese postwar literature, but discrimination against patients with dementia or mental hospital have been depicted in this novel. To read this novel would be helpful in knowing a history on the elderly issues, and we can find out the importance of reading Japanese postwar literary works on liberal arts education at university.

KEY WORDS : Japanese postwar literature, liberal arts education, aging society

はじめに

本稿は、現代高齢社会の問題を考えるためのテキストとして、文学史的にも有名な安岡章太郎「海辺の光景」(『群像』1959.11,12)を読むことを目的としている¹。議論に際しては、筆者が平成26年度の後期に本学で担当し、上記作品を取り上げた「総合教養基礎ゼミナールⅡ」の授業計画を参照する。

もっとも当該授業の目的は、高齢社会の問題を考えるために戦後の小説を読むことではなかった。後述するように、当初は「海辺の光景」を含めて4篇の小説を取り上げる予定であり、授業のねらいとしては戦後高度成長期の日本を振り返るという大きな枠を設定していた。しかし、授業開始後にスケジュールの大幅な変更を余儀なくされ、「海辺の光景」と深沢七郎「楢山節考」(『中央公論』1956.11)の二篇のみを扱うことになった結果、焦点は自ずと現代の高齢社会の問題を考えることへと絞られていった。

そうした意味では、本稿の問題意識は担当授業を基にしているが、授業内容の報告は目的ではない。授業を経て改めて「海辺の光景」を読み直し、人文学系の学部には所属していない学生に文学作品を読んでもらうための一つの視座を提供したいと考えている。

1. 当該授業の計画と変更

人文系の学部がない本学において、教育に文学作品の読解を取り入れることは、学生の興味関心という点から考えても、予備知識のなさという点から考えても困難なことである。もとより、文学研究を行うためには不可欠な文学史や文学理論についても、文学部の学生に対するのと同じように教授するわけにはいかない。

そこで筆者は、平成26年度後期開講の「総合教養基礎ゼミナールⅡ」で高度成長期に発表された文学作品数篇を取り上げ、希望に満ちた時代として振り返られることの多い高度成長期を別の視点から検討するために3篇の小説を取り上げることにした。右に掲げたのは、当該授業のシラバスである。

表1の「授業概要」欄にあるように、シラバス作成時の授業のねらいは「希望に溢れた時代として顧みられることが面での変化のみならず、生活スタイルや住環境など日本人の生活において多方面で劇的な変化があった時期であり、それまでの伝統的な環境や習慣が失われていった。そうした「喪失」の側面を視野に入れ、「戦後日本における近代と伝統の問題について考

表1 「総合教養基礎ゼミナールⅡ」シラバス

授業科目名 (Subject)	総合教養基礎ゼミナールⅡ Basic Seminar in Liberal Arts Ⅱ			単位数
				2
担当者	高橋 啓太 (Takahashi Keita)			専任
授業形式	演習	科目区分	総合教養科目	経済学部
配当年次	1年生	開講学期	後期	
授業概要	映画『ALWAYS 三丁目の夕日』に代表されるように、戦後の高度成長期は希望に満ち溢れた時代として顧みられることが多い。だが、当時の文学テキストの中には、戦後をいわず喪失の時代と捉えているものが少なくない。この演習では数篇の小説を取り上げ、戦後日本における近代と伝統の問題について考えてみたい。			
授業の到達目標	①問題意識を持って文学テキストを読み、分析することができる。			
	②文学テキストを読解した結果をまとめ、口頭発表の形で報告できる。			
授業が重視する教育目標【◎特に重視 ○重視】				
1) 総合的な視野で自己分析し、社会や他者との関わりの中で問題意識をもって生きる力の涵養。				◎
2) 上記の問題意識に立って、自己実現と社会貢献に向けた具体的な目標設定ができる力の涵養。				○
3) 自ら知的な就業能力を開発し、意義ある職業選択と生涯にわたる学習・創造活動を可とする力の涵養。				○

え」ることであった。

第5回目までの授業は、作品を読む前の予備学習に費やした。第2回の授業では、三種の神器と呼ばれる家電製品の登場や、産業構成における第一次産業比率の激減など、高度経済成長期における日本社会の変化について、正村(1993)を参照しながら解説した²⁾。履修者が3名のみであったことも考慮し、第3-5回目の授業も口頭発表の仕方などについて時間をかけて解説した。そして、第6回目から「楢山節考」、「海辺の光景」、藤枝静男「一家団欒」(『群像』1966.9)の順に読解及び学生による口頭発表を予定していた。しかし、深沢七郎「楢山節考」の発表を担当する予定であった学生が数回続けて無断欠席をしてしまい、さらに、他の学生も部活動やインフルエンザなどの理由で相次いで欠席するなどの事態もあり、「一家団欒」を扱う余裕はなくなった。結局、「海辺の光景」についての口頭発表を先に行い、「楢山節考」の発表担当の学生が終盤になってようやく出席してきたため、最後の2回の授業の中で口頭発表を行った。

以上のように、授業計画は狂ってしまったが、結果として、高齢社会の問題を考えるというより限定されたテーマに基づいて「楢山節考」と「海辺の光景」を読むことができた。そうした意味では、教養科目の授業の中で文学作品を取り上げる試みを実践することができたといえる。

本稿では取り上げないが、深沢七郎「楢山節考」も高齢化について考えるに値する小説である。同作は江戸時代の信州の山村を舞台にし、村の食糧確保のために老人を山に遺棄するという棄老伝説をモチーフにし

ている。主人公のおりんは69歳にして心身ともに健康であるが、70歳になると「栖山まいり」（棄老のこと）に行かなければならないという村の掟に従い、自ら歯を折り、息子の辰平に背負われて山に遺棄される。発表当時からこの作品は文壇で大きな反響を呼び、木下恵介や今村昌平によって映画化された。近年では、小坂（2004）が報告しているように、福祉系の学生に対する専門教育の中で、文学研究とは全く異なる視点からこの小説を取り上げた例も見受けられる³⁾。

2. 「海辺の光景」の文学史的位置づけ

本節では、「海辺の光景」のあらすじと文学史的評価を確認しておきたい。同作は、東京にいる浜口信太郎が認知症を患い高知の病院に入院している母・チカを父・信吉と共に見舞い、チカの最期を看取るまでの九日間を描いている。安岡自身が母親を亡くしたときの経験に基づいた小説である。作中では、信太郎がチカと一緒に暮らしていた戦中や軍隊の獣医であった父が復員してきた戦後の生活など信太郎による回想が断続的に挿入されており、病院にいる現在時の時間が寸断されている。

回想場面を通して語られるのは、チカが信吉を嫌悪していたことである。例えば、「ちょうど満州事変がはじまって間もないころ」の回想では、「御用聞が「おたくの旦那は軍人さんですってね」と問いかけた」のに対して、「（獣医だ）と信太郎は答えようとして、コタツの下から母の手で足をギュッとつかまれてしまい、その後に「そのとき母の羞恥心が端的に息子の心にのりうつった」と語られている。また、これより前の部分では「父のすることなすことは、食べ物のみから職業のえらび方まで一切合財、ことの大小にかかわらず、みな好ましくないものとして教えこまれてきた」とも書かれている。

戦後の信吉の復員は、母子密着の関係にあったチカと信太郎を経済的な問題に直面させる。「信太郎と母とは、父親の帰還ではじめて敗戦を迎えたわけだった。それまで彼等は、何の根拠もなしに自分たちは月給でくらして行けるものだと考えていた」が、信吉は無職となり、養鶏を試みるが失敗に終わる。チカは「近所となりの洗濯物にアイロンをかけることから、闇物資のブローカーの手伝い、家の一部を美容師兼マッサージ師に貸して自分も客の頭髪を洗ったり、怪しげな手つきで肩や腰をもんだり、等々」を試みるが、「どれもウマく行くはずはなく、生活は極めてあやうかつ

た」。また、当初は叔父から借りていた東京の借家の家主が替わり、「信吉たち一家は、家屋不法占有で告訴され」てしまう。その後、信太郎は東京に一人東京に残り、信吉とチカは信吉の郷里である高知に移住する。そして、移住と前後して、チカの言動に異常が見られるようになる。

江藤淳は『成熟と喪失—「母」の崩壊—』²⁾の中で、以上のような「海辺の光景」の展開について、次のように述べている。

つまり「恥づかしい」夫＝父は、それにもかかわらず信太郎母子の小宇宙を支える秩序の基礎であり、したがってひとつの権威であった。だがこの秩序と権威がやがて崩壊する。それは正確にこの主人公が強いられた「成熟」の最初の段階、あるいは彼と母親との内密な世界の喪失の第一歩である⁴⁾。

江藤はこの著書の冒頭で、敗戦によって父の「権威」が「崩壊」したという物語によって戦後日本の近代化を捉え、それにより「日本の母親と息子」の「ほとんど肉感的なほど密接な関係」が失われていったと述べている。そして、そうした「喪失」の一部始終を描いたテキストとして「海辺の光景」を取り上げているのである。

チカが亡くなった後の信太郎について、江藤は「自然」のなかでではなく「社会」というもののなかで、つまり人と人とのあいだで生きて行かなければならぬことを自覚しなければならなかった」と述べ、息子が母子密着の関係性から離脱することを「成熟」と呼ぶ。しかし、「人と人とのあいだで「自由」に生きるとはどういうことであるか」を体現した「主人公を、今日にいたるまで私はまだ安岡章太郎氏の小説のなかに見出すことができない」とも述べており、あくまでも母子密着の「内密な世界」の「喪失」までを描いた作品として「海辺の光景」を位置づけている⁴⁾。

「海辺の光景」が発表されたのは1959年であり、日本は高度経済成長期に突入していた。江藤は、父の「権威」の「崩壊」と母の「喪失」によって人は「成熟」という物語を敗戦後の日本のメタファーとして設定し、経済成長していく戦後日本を別の側面から捉えようとした。この作品は母親を亡くした安岡自身の経験を基にした作品であるが、江藤は戦後日本における「成熟」と「喪失」の物語を「海辺の光景」に当てはめた。そのことにより、「海辺の光景」の文学史的な

評価は確立したのである。

3. 「海辺の光景」読解のパースペクティヴ

「海辺の光景」では、語り手が信太郎に焦点化している。そのため、自ずと信太郎の独白が作品の叙述の中心となっている。作品の末尾では、チカが亡くなり病院を出た信太郎が「波もない湖水よりもなだらかな海面に、幾百本ともしれぬ杣が黒ぐると、見わたすかぎり眼の前いっぱい突き立っていた」光景を目にして、「歯を立てた櫛のような、墓標のような、杣の列をながめながら彼は、たしかに一つの“死”が自分の手の中に捉えられたのをみた」。母親を亡くした信太郎の心理が風景に投影されているわけである。

江藤に限らず、他の「海辺の光景」の先行論でも、信太郎の心理に注目したものがほとんどである。例えば、「戦争を通った後の青年の一種の感受性の悲劇みたいなもの」⁵⁾が作品全体を貫いていると述べる亀井勝一郎、「世人の迷信すらも母の死と結びつけて感得している信太郎の立像にこそ、虚無の果ての亡母への憧憬と人生の約束が託されているのである」⁶⁾と指摘する村松定孝、「安岡は私小説的手法を通して自己の〈青春〉を覆いつくした戦中と戦後の一体化という独創的な困難な作業に挑み、青春を内部深くから客観化しようとする」⁷⁾と論じる佐藤昭夫、「病院への隔離による排除を余儀なくされた母親の最後を看取するという外形的な出来事の継起の内で、おそらく心性としての〈母殺し〉を信太郎はその基底から形成している」⁸⁾と指摘する杉本優など、同時代評から比較的近年の論考に至るまで枚挙に暇がない。

だが、回想場面も含めてチカが錯乱していく様子を描いているこの作品は高齢社会の問題、より限定して言えば、認知症を描いているといえる。後述するように、チカが「老耄性痴呆症」であることも作中で示されている。

回想場面の一つである東京の借家を出る前後のエピソードからも、チカの「痴呆症」の症状は明らかである。信吉とともに高知に移住することになったチカは、出発当日の朝になって、「小型のワニ革のスーツ・ケース」を紛失したことに気づく。東京に残る信太郎が「警察や、国電と私鉄の乗り換え駅など、きのう母親がたどったと思われる路で、心当りの場所を一つ一つたずねながら、カバンの行方を探索したが、やはりどこにも見あたらず、手掛りになるようなことさえつかめなかった」。結局、「スーツ・ケース」はチカが借家

に置き忘れており、隣人がそれを預かっていた。また、「それから三ヶ月ばかりたった或る日」、信太郎はチカから「ひどく曲った大小ふぞろいの字が、封筒の上いちめんに散らばっており、切手は裏面の封をとじた合せ目に貼ってある」手紙を受け取る。「封を切ると、ほとんど白紙のままのものや、二三字書いただけでクシャクシャに消したり、デタラメにインクをなすりつけたような字が並んでいるレターペーパーが出てき」て、「わたくしはこの間キチガイ医シャのところへ行つてまゐりましたが べつにどうといふワルイこともないやうです」「伯母さんはとてもワルイ ワルイ ひとです まい日オコリどほして この間もマキをもつてわたしを追ひかけてきました」と書かれていた。

信太郎はこのような手紙を書いたチカの状態をさほど深刻なものとは考えていない。チカからの手紙と同時期に届いた信吉の手紙を読むと、「結構、伯父たち夫婦とも仲良く暮らしている様子で、母についてはただ、「この頃は錯覚に悩まされること多く、はたからも見兼ねるほどに候」と書かれていたのだが、「母と父と、どちらの手紙が本当なのか、信太郎にはわからず、「どちらを読んでも憂鬱な心もちにさせられる」だけである。当時はまだ認知症に対する認識がさほど深まっていなかったという理由もあるだろうが、「海辺の光景」では、チカの錯乱は「狂気」として捉えられている。そして、先に紹介した先行研究でも作中での見方はほとんど相対化されていない。その理由は、「海辺の光景」が信太郎の「成熟」をめぐる青春小説として読まれてきたためである。

だが、「1. 当該授業の計画と変更」の冒頭で述べたように、人文系の学部には所属していない学生に対する授業で文学作品を取り上げる場合、旧来の文学史的な評価を踏襲し、教養として文学作品を読むだけでは生産的とはいえない。「海辺の光景」に関していえば、現在であれば主題的に描かれるであろう認知症や高齢者介護の問題が描かれていないことの問題を考えるなど、現代社会に引き付けた読解が必要になると思われる。また、信吉・チカ・信太郎という家族の形態、つまり、核家族という家族形態が高度成長期に増加していったことを踏まえて読むこともできる。国立社会保障・人口問題研究所の人口統計資料によると、全世帯に占める核家族の割合は1955年には59.6%、1960年に60.2%、1970年には63.5%と高度成長期に増加していった¹⁰⁾。石原(1989)のように、核家族という家族形態の問題を考慮しながらチカと信太郎の母

子関係を論じることにも可能であろう¹¹⁾。

次節では、有吉佐和子の『恍惚の人』を参照して、認知症の描かれ方が戦後の文学の中でどのように変化しているか確認したい。

4. 作品の読解と高齢者福祉

実は「海辺の光景」においても、チカの「狂気」が病気であることは明確にされている。高知の病院に駆けつけた信太郎は、チカの症状について医者と話している。

母のかかった老耄性痴呆症とは、どんな病気をかかっているかを確認してみた。

「さア、われわれにも良くは、わかりません」
医者は腰に手をあてて、長身の体軀をそらせるように云った。「とにかく戦後、増えましたな、こういう病人が……」

身体の各部は健全なのに、脳細胞だけが老衰する。医学が発達して人間の寿命がのびるにしたがって、この種の患者が多くなった。現在ではアメリカでもっとも多く見られる病例である。と、そんなことを話した。

現在では、「痴呆症」という呼称は患者に対する侮蔑的な意味合いを持っているとされ、認知症という名称が用いられていることは周知の通りである¹²⁾。認知症をめぐるのは介護はもちろん、昨今では詐欺被害や徘徊による事件事故などの問題も大きく報道されている。しかし、「海辺の光景」の中では、チカの「痴呆症」の症状は主題的に扱われてはいない。その一方、信太郎以外の人物も含めて、チカが入院している病院や患者への差別的な言動が散見される。チカが入院しているのは、永楽園という精神病院である。一年前、チカを入院させるために信吉らとともにタクシーに乗った信太郎は、運転手に病院名を言うのをためらい、ようやく「耳もとでささやくように云った」。運転手は「エイラクエン？」と「大声で問いかえし」、「はア、これでっか」と、自分の頭を指した手を空で二三度ふりまわした。

杉本（1998）が指摘するように、この作品には精神病院や精神病患者に対する差別的な言動が随所に確認できる¹³⁾。他の箇所でも、信太郎やその他の作中人物による精神病や患者に対する差別的な言動が見られるが、精神病院自体も患者に対して劣悪な環境である。

永楽園の看護人の男は、信太郎に「医者も看護人も、ただ居るというだけで、きわめて無責任であること、ことにあの病棟はどうにも手のほどこしようのないと思われる患者だけが収容されるために、放りっぱなしにされていること」を告げている。川嶋至は作中での精神病院の描かれ方を踏まえて、1970年に大熊一夫が『朝日新聞』紙上で連載した「ルポ・精神病棟」³に言及し、「あの看護人の男が訴えた永楽園の実態は現今（1970年当時）の悲惨な日本の精神病院のそれに近いものだった」¹⁴⁾（括弧内引用者）と指摘している⁴。精神病院であるため、若年の患者も入院しているわけだが、チカのような高齢の認知症患者も劣悪な環境下に置かれていたのである。

「海辺の光景」を読むと、当時は認知症患者も含めて精神病院に入ることは珍しいことではなかったことがわかる。永楽園の医者は、「母のような病気にかかっている者が全国でどれぐらいいるのか」と質問した信太郎に対して、「それがサッパリわかりませんですよ。外国の場合だと、老人だろうと何だろうと、すぐに入院させるのですが、こちらは家族主義というか、個人主義思想の徹底がたらんというか、たいていは家へ置いて外へ出さんようにしますからね。ことに病気の性質から云って年寄りが多いものですから」と答えている。文脈からいって、「痴呆症」の患者を「入院させる」病院とは精神病院を指していることは間違いない。

「海辺の光景」より10年以上後に刊行され、認知症高齢者の介護を主題とした有吉佐和子『恍惚の人』¹⁵⁾⁵の中にも、精神病院への言及がある。この長篇は、主人公の立花昭子が義理の父親で認知症になった立花茂造の介護に忙殺されていく様子を描いている。自宅での介護に疲弊した昭子は、茂造を施設に入れることを考え、「老人福祉指導主事」に相談する。この主事は「東京都民政局の発行による「老人ホーム利用案内」」のパンフレットを持参しており、そこには「低所得者のための養護老人ホーム、特別養護老人ホーム、軽費老人ホーム、それから有料老人ホームと四種類」が紹介されている。昭子は、各施設の利用資格や費用を確認していくが、どの施設にも茂造を入所させられそうにない。茂造の介護の大変さを訴える昭子に対して、「老人福祉指導主事」は「立花さん、老人性鬱病というのは、老人性痴呆もそうですが、老人性の精神病なんですよ。ですから、どうしても隔離なさりたいなら、今のところ一般の精神病院しか収容する施設はないんです」と言う。1970年代前半になっても、認知症の高

齢者を受け入れる環境はこのようなものであったということがわかる。

この作品には、「はっきり分かったのは、今の日本が老人福祉では非常に遅れていて、人口の老齢化に見合う対策は、まだ何もとられていないということだけだった」という昭子の認識を通して、当時の国による福祉対策の遅れが指摘されている。また、有吉自身も「私は最初から、老人問題は他人ごとじゃない、子供でもいつか年寄りになる。まして私たちはもうじきなるというふうなことは、テーマとして繰り返し入れておきたいと思ったんです」¹⁶⁾と『恍惚の人』執筆の意図を述べている。

安岡には、「海辺の光景」執筆に際して「老人問題」を取り上げようという意図はなかった。安岡にあったのは、「これを書くことによって、心の中に欠落している何かを突き止めようという野心めいたものがあり、その欠落したものを、最後の干上がった海の底から突き出してくる黒い棒状の行列の場面と照合させたいという、いわば芸術的な意図」¹⁷⁾であった。安岡はその後に「そうした野心や意図は消えて行き、ついにはこれまで自分の生きてきた人生の一断片といったものを追うだけになってしまった」と続けているが、いずれにしても母親の死という「人生の一断片」を題材にした作品であることがわかる。

しかし、安岡の執筆動機が有吉とは異なり、また、『恍惚の人』から時代をさかのぼるとはいえ、チカを精神病院に隔離したという選択について、信太郎にほとんど逡巡がないことには注目しておいてよいだろう。「海辺の光景」では主題的に描かれていない認知症患者とその介護をめぐる環境や認識という側面に注目することで、高度成長期の日本社会における高齢者福祉の状況を垣間見ることができる。

おわりに

本稿で試みたのは、文学史的には青春小説として読まれてきた「海辺の光景」を別の角度から読み直すことである。それは、文学への関心が高くない（あるいは全くない）学生が大学の授業において文学作品を読む意義を見出したいがためであった。認知症患者や高齢者福祉の問題は現代日本で大きく取り上げられており、そうした問題が過去にはどのように認識されていたのか知るための題材として、「海辺の光景」を読む余地があるだろう。

強調しておきたいのは、上記のような視点から「海

辺の光景」を読解する目的は、当時における高齢者の扱いや病気に対する認識を単純に批判することではないということである。もちろん、時代の制約があるからといって、差別的な表現や描写を不問に付してよいわけではない。だが、作品の差別的な面を批判するだけでは、高齢社会の問題を考えることにはならない。人文系ではない学部生に対する教育としては、かつての日本における高齢者福祉の状況を理解し、現代に至るまでに認知症という病気への認識や高齢者介護のあり方がどのような変化していったのかを考えることが必要であろう。その教育の端緒として、「海辺の光景」を読むことは有益であろう。

ただその一方で、従来の文学史的な評価を無視してよいわけではない。なぜなら、文学作品の受容や評価のあり方をまず把握し、そのうえでこれまで見過ごされてきた要素や評価の問題点を発見していくという過程を通して、学生は物事を多角的に捉える視野の広さ、あるいは問題発見能力を養うことができるからである。それは、全学的に展開されている大学の教養教育科目が果たすべき重要な役割である。「海辺の光景」についていえば、「痴呆症」の患者が増加しているという医者の話や精神病院の環境の説明が盛り込まれているにもかかわらず、文学史的には母を「喪失」する息子の青春小説として読まれてきたという事実を踏まえることで初めて、別の角度からの分析・考察の余地を見出せるのである。

高齢社会の問題に限らず、社会問題を考えるためには制度・政策の検証、データの分析など実証的な調査が必要であることは言うまでもない。だが、ある問題について具体的な分析・考察を行う前段階として、まずはその問題に興味関心を持つことが必要である。高齢社会の問題に限らず、一般教養科目の中で小説というフィクションを読むことは、学生の視野を広げ、社会問題に対する興味関心を引き出すための有効な行為となり得るはずである。

注

- 1 本稿における「海辺の光景」の引用は、安岡（1986）に拠り、ルビは省略した。
- 2 同書は、1962年に河出書房新社より刊行された。
- 3 同連載は、のちに『ルポ・精神病棟』（朝日新聞社、1973）として刊行された。
- 4 川嶋（1970）の引用は、参考文献9）日本文学研究資料刊行会編（1983）、p.42に拠った。また、先述の阿部ら（1960）、村松（1969）の引用もそれぞ

れ、同書p.22, p.53に拠った。

5 『恍惚の人』の引用は、有吉（1972）に拠った。

参考文献

- 1) 安岡章太郎（1986）：安岡章太郎集5. 岩波書店.
- 2) 正村公宏（1993）：図説戦後史. ちくま文庫, p.224, p.280.
- 3) 小坂淳子（2004）：「老人福祉論」の授業における二つの試みと考察—高齢者・障害者への観察力・想像力をはぐくむ—. 創発 大阪健康福祉短期大学紀要, (2), 21-41.
- 4) 江藤淳（1993）：成熟と喪失—「母」の崩壊—. 講談社文芸文庫, p.20, pp.33-34.
- 5) 阿部知二, 他（1960）：創作合評. 群像, 15 (1), 255-267.
- 6) 村松定孝（1969）：安岡章太郎—『海辺の光景』を視座として—. 国文学 解釈と教材の研究, 14 (3), 57-61.
- 7) 佐藤昭夫（1989）：『海辺の光景』（安岡章太郎）. 国文学解釈と鑑賞, 54 (6), 73-75.
- 8) 杉本優（2006）：安岡章太郎—「海辺の光景」. 国文学解釈と教材の研究, 71 (2), 65-72.
- 9) 日本文学研究資料刊行会編（1983）：日本文学研究資料叢書 安岡章太郎・吉行淳之介. 有精堂. 上記5),6)及び下記14)所収.
- 10) 国立社会保障・人口問題研究所（2014）：家族類型別世帯数および割合：1920～2010年. 国立社会保障・人口問題研究所ホームページ, http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2014.asp?fname=T07-11.htm, 2015年7月5日入手.
- 11) 石原千秋（1989）：母・家庭・性の変容. 講座昭和文学史4, 有精堂, 17-30.
- 12) 「痴呆」に替わる用語に関する検討会（2004）：「痴呆」に替わる用語に関する検討会報告書. 厚生労働省ホームページ, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/12/s1224-17.html>, 2015年6月25日入手.
- 13) 杉本和弘（1998）：「海辺の光景」論—幻想としての〈母〉. 国際関係学部紀要, 20, 131-144.
- 14) 川嶋至（1970）：安岡章太郎私論. 群像, 25 (9), 234-249.
- 15) 有吉佐和子（1972）：恍惚の人. 新潮社.
- 16) 有吉佐和子, 平野謙（1972）：老いについて考える. 有吉（1972）付録, p.5.
- 17) 安岡章太郎（1986）：後書. 安岡章太郎集5, 岩波書店, p.470.